

世界の中の日中関係

一月一七日 岡部達味

1. 国際関係から見た日中関係

- 二国間関係から、世界の中の関係へ。
- 二国間の「対等か従属か」ではなく、「台頭する中国と既存世界との関係」へ。
- 中国の台頭を止めることは出来ないし、止めるべきではない(戦前日本の台頭とのアナロジー)。
- 台頭する中国とのつきあいとしての日中関係(米中関係の先進性)。
- 幾つかの問題点あり。
 - a. 大国中国との望ましい関係に必要な、日本の「パワー」としての技術格差。
 - b. 台湾問題(台独支持の無理)。
 - c. 軍拡問題。

2. 中国の軍事力をどう見るか？

- 中国の軍事力、特に海空軍力の発展めざましい。
- その要因として、一八四〇年以來の屈辱と「自強・自立」への強い願望。
- 最近まで、アメリカのお情けで安全だった。
- 自立自強は、国土防衛から、シーレーン防衛に目標拡大。
- そのため、情報化に努める解放軍。未完成だが、宇宙大国化へ。第二ないし第三の軍事大国へ。
- 今の段階では、「自衛軍」、しかし、将来また目標拡大あり得る。目標は能力の関数。特にユニラテラリズムの傾向あり。

3. 日中両国の内部問題

- 政府関係は改善へ順調な歩み、福田訪中・胡錦濤訪日。その背景に、日本に対する経済技術支援の欲求。
- 問題は民間レベル。中国人の一部、特に知識人レベルでの反日感情顕著。戦争のみならず、一九一〇年代からの記憶。中国人の「長い記憶」(日本人の短い記憶と対照的)、党と国家の正統性をかけた宣伝の影響。軍艦交流に関し、日本の軍艦が「丸子旗」を掲げて中国の港にはいることへの心理的抵抗、深セン号乗組員の「緊張」等が一例。
- 日本人の間にはかつて親近感。新世代にはその記憶なし。天安門事件の記憶のみ。これが江沢民時代の「大国主義」への反感へ。「反日」に対する「反中」も。

4. 出口を探る

- ・ 戦略的思考を。情緒的「反感」の不毛性、軍拡競争の不毛性。共通利益に基づいた「平和友好関係」へ。
- ・ 共通利益としての資源共同確保、共同保障。など考えられる。多国間主義の土俵へ持ってくること大事。中国自身は、ASEAN、中央アジアとは多国間関係へ。アメリカとも「対等関係」、共同覇権？
- ・ 技術格差を利用した関係へ。環境保護、省エネ技術等。
- ・ 民衆レベルの「戦略思考」、国際関係観の「現実」化必要。

以 上

略 歴

一九三二年、東京生。

東京大学卒業、社会学博士(国際関係論専攻)

都立大学助教授、教授を経て、一九九五年同停年退職、専修大学教授就任(いずれも国際政治学担当)。

一九八五年から日中友好二一世紀委員会専門委員、一九九〇年より、同委員、九七年～二〇〇二年まで同日本側座長。

二〇〇三年、専修大学停年退職。